

北の魚が近畿の小さな川にも遡上した！

阿蘇海（天橋立）にそそぐ小さな川のサケと守る人（29.11）

船本 浩路

石津川と同規模の京都北部の小さな川に北の魚として知られているシロザケが遡上しているという少し驚くような話題を知った。私はサケの母川回帰（産卵のために生まれた川に回帰する）には前々から興味を持っていた。タイミングよく11月に話題提供者の蒲田充弘氏（NPO 法人・丹後の自然を守る会代表）に現地案内をしていただく観察会が私のお世話になっているNPOが企画したので参加させていただいた。

<サケの遡上観察>



サケのペア（蒲田氏によると産卵間近とか）



産卵後は命が尽きる

舞台は日本的に有名な天橋立の奥にある阿蘇海に注ぐ野田川（流路約15 km）である。幸い天気に恵まれ、地区の方々によって整備された河川敷をサケの保護活動の拠点となっている後野区公民館まで観察しながら歩いた。数は多くないものの、コイより一回りも二回りも大きな魚体が、一尾で或いはペアで泳いでいるのを発見。元気なペアと違って、産卵を終えた個体は、産卵床をつくる時に負った傷であろうか、体全体、特に尻尾がボロボロである。蒲田氏によると遡上したサケは一定の場所に留まるのは10日程度とのこと。その間にパートナーを見つけ産卵し、その後は死んでいくという。26名の参加者は全員感慨深げにサケの行動を見つめておられた。我々は子どもが誕生した後、環境が変わろうともそれに対応した子育てをすることがで

きる。一方サケは卵を産んで死ぬ。後はその環境に託する。自分が巣立った時の環境より悪化していないことを祈って、遙かベーリング海より4年ぶりに故郷の川に帰り最後の営みを行う。まさに感動ものだった。余談だが、春期には当然たくさんのアユも遡上してくるとのこと。

<海を守るための取組み>

蒲田氏は京都市で服飾デザインの仕事を経て、故郷の与謝野町（京都府）で環境保全活動に取組んでおられる。きっかけは、子どもの頃に遊び場とたくさんの恵みをいただいた家の前の海が汚れ、子ども達に同じ体験をさせられないという危機感だった。阿蘇海は大部分が天橋立で仕切られているので海水の交換が悪く汚れやすい。この海をきれいにするにはどうすればよいか考えた。はじめは、汚れの原因は付近の工場だろうと思ったがそうではなかった。ひょっとすると自分たちの生活から出る廃食油も原因かも知れないと考え、廃食油が捨てられないように有効活用を考えた。それがBDF（バイオディーゼル燃料）製造であった。各戸から回収をするには大変苦勞もしたが一定量集めることができるようになり、それが認められBDFを製造する装置を補助金で自宅の横に作る事ができた。今では京都府北部地域で2万世帯（推定）から回収している。化石燃料の消費を抑えることから地球温暖化対策としても有効だと。製品は今までは公的機関のディーゼル車に使用したが、今は農業用トラクターや海外に輸出している。次に取組んだのは目の前の海にできるカキ殻礁の撤去であった。カキ殻が大きくなればそれが障壁となり海水の交換を悪くする。それを地元と大学生の力を借りて除去するイベントを実施している。また、高負荷な農業排水が川に入る心配があったがサケの遡上が地域の自慢となり、その排水にも各農家が配慮する機運が高まった。

<彼の強い思い>

ボランティアとしてなぜここまでやれるのですかと聞いてみた。「ふるさとに対する思い」との言葉が返ってきた。彼の口からは「地域」という言葉が頻繁に出てくる。地元の山海の食材をたっぷり使った「リフレかやの里」での懇親会には、区長さんらはもとより、蒲田氏の紹介で丹後ちりめん織元の安田さん、且ミカン園の岸田さんが参加してくださり、地域の多くの宝物を紹介していただいた。彼は環境保全活動には地域の活性化が不可欠との信念があるようだ。

<感想など>

丹後ちりめん歴史館、智恩寺、元伊勢籠神社を見学し歴史文化にも触れた。予期せぬことに7羽のコウノトリも迎えてくれた。副区長さんからは丹精込めて作られた新米をお土産にいただいた。我々は都市部では

見られない自然に会いたくて地方に出かけている。そして行くところで素晴らしい自然に出会い、それを支えている人がいることにも気づく。今回の観察会もそうだった。地方にはそのような方々が実に多いようにも感じる一方、自分は今住んでいる町に対しての「思い」はどのようなだろうと考えた。今回の観察会はそういう点からもいろいろ勉強になった。

- 観察の動画 https://www.youtube.com/watch?v=10vPQl73D_8&t=10s (北近畿の小さな川でのサケの観察)

